一般財団法人日本不動産研究所

全国 市街地の変遷 ⑯

――昭和の記憶から次代へ

名古屋市・「ごった煮」が魅力の大須商店街

老若男女国籍問わず

名古屋観光で欠かせない人気スポットといえば「大須商店街」である。名古屋市中区大須2～3丁目界隈の4つの大通りに囲まれたエリアに所在し、東西南北にアーケード街が広がっている。路地裏を含めると約1200の店舗・施設があり、空き店舗はほとんど見当たらない。老若男女、国籍を問わず、県外からも多くの人々が観光や買い物で訪れる。

そんな大須の最大の魅力は「ごった煮」の雰囲気だ。文化・芸術、ファッション、グルメ、歴史が融合し、デジタルとアナログ、古さと新しさが共存している。都心商業地にはない懐かしさや面白さが人々の興味を惹き付けている。

大須の歴史は古い。名古屋城が築城された1610年の2年後、現在の岐阜県羽島市にあった「大須観音（北野山真福寺宝生院）」が徳川家康の命により現在地に移転。以降、門前町として発展し「大須」と呼ばれるようになった。大正元年には「万松寺」が寺領の山林の大部分を商業用地として解放したことで、劇場、演芸場、遊技場、映画館などが数多く作られ、名古屋市随一の歓楽街として繁栄した。

しかし、第二次世界大戦末期の名古屋大空襲（1945年）により付近一帯が焦土と化し、大須は壊滅的な被害を受けた。その後、戦災復興土地区画整理事業で100㍍道路が整備され、都心部の栄地区とも分断された。客足の流れが変わり、時代の変化から取り残され、大須は衰退へと向かうこととなった。

大須のシンボル「大須観音」

「来てもらえる街」へ地道な努力が結実

都心商業地にない面白さ

70年代後半に入ると、大須商店街は再生に向けて始動する。名城大学の助教授や学生の呼びかけで、若手商店主らが中心となり、「アクション大須」というイベントを開催。後の「大須大道町人祭」へと受け継がれ、現在も続いている。77年には地下鉄3号線が開通し、大須観音駅、上前津駅が開業、同年に「ラジオセンターアメ横ビル」（現第1アメ横ビル）がオープンした。これを契機として大須に若者が集まるようになり、アメ横周辺に家電店やパソコンショップが相次いで進出。秋葉原（東京）日本橋（大阪）に次ぐ電気街として発展した。こうした若者世代をターゲットにファッション、カジュアル、飲食店が集積し、現在の大須商店街が形成されていった。

㊤ラジオセンターアメ横ビル（現第一アメ横ビル）のアーケード街「東仁王門通り」

㊦大須

大道町人祭は40回目

全国的に郊外型大規模商業施設の開業など外部環境の変化により、中心市街地や商店街が衰退し、空き店舗が増加している。かつて大須もそうした時代があったが、今では平日3万人、休日7万人が訪れる活気ある商店街へと変容を遂げた。再生の鍵は「いかに大須に来てもらえる街にするか」である。

78年に始まった毎年10月の「大須大道町人祭」は今年で節目の第40回を迎える。そのほか、10日に1度といわれるほど年間を通じて多種多様なイベントが開催されて「いつも新たな発見がある街」という評価が定着した。来訪者のための散策マップの作成や土日限定の案内人の配置などのサービスも行っている。こうした商店街連盟や地域住民の地道な活動、不断の努力が成功の要因といえよう。

（日本不動産研究所東海支社、不動産鑑定士・池田雄士）